

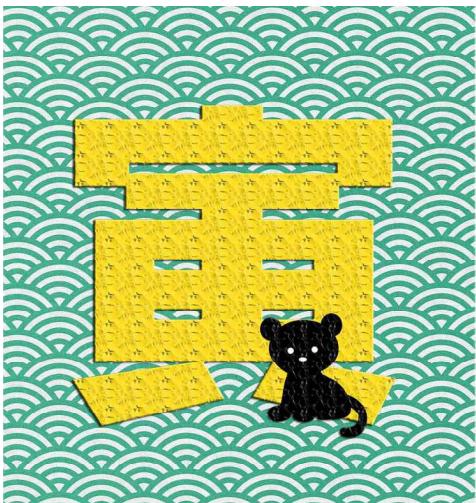
加茂川中学校だより2021



京都市立加茂川中学校
令和4年1月6日(木)

第10号 1月号

文責：校長 山下 道夫



令和4年の干支は「壬寅（みずのえとら）」です。厳しい冬を越えて、芽吹き始め、新しい成長の礎となる年という思いが込められています。干支で何が分かるのかと思われるかもしれません、もともと干支は世の理（ことわり）を知り、未来に備えるために生み出された暦のシステムであるそうです。干支はそれぞれに意味があり、それによると「壬寅」は「陽気を孕み、春の胎動を助く」、冬が厳しいほど春の芽吹きは生命力に溢れ、華々しく生まれる年になるということだそうです。

干支のシステムは、中国の古い思想である陰陽五行説を礎にした、60年周期で繰り返す暦です。陰陽五行説とは、世の中のすべては、それぞれ独自の性質を持つ5種類の元素「木・火・土・金・水」に分類され、「陰」と「陽」に分かれるという思想です。そして干支も五行、陰陽に影響されると考えられています。干支は、十干（じっかん）と十二支の組み合わせでできています。

十干は太陽を象徴とした生命の循環を表していて、「甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸」の10種類あり、1番目の「甲」は草木の芽生えを、10番目の「癸」は落ちたタネが土の中に潜ることを意味するそうです。そしてまた1番目に戻って繰り返す。

十二支は月を象徴とした生命の循環を表していて、「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」の12種類あり、1番目の「子」は生命の種子が宿ることを、12番目の「亥」は次世代のタネの中に生命力が閉じこめられることを意味するそうです。これもまた1番目に戻って繰り返していきます。この2つを組み合わせ、「甲子」「乙丑」「丙寅」といった具合に順番に並べたのが干支です。1番目の「甲子」から始まって、60番目の「癸亥」で終わり、また最初にかえって繰り返す。これを還暦と呼ばれ、60歳になつたらお祝いをする理由となっています。

古代人たちはこの生命の循環に神の大いなる意思を見たのでしょうか。干支とは、この2つの神の意志を組み合わせる「二元論的手法」によって世の理を解き明かそうとしたものなのです。

二元論とは、異なる2つの原理で物事を解明しようとするもので、古代人たちが二元論的世界観を持っていたことは広く知られています。中国の陰陽思想をはじめ、インドの神秘主義やゾロアスター教、グノーシス主義などもそのようです。またこのような循環する暦のシステムは、東洋に限ったことではなく、アイルランドの古代ケルト暦、古代ローマ帝国のユリウス暦、古代エジプトでも見られます。エジプトのアブシンベル神殿では、毎年2月22日と10月22日の2日だけ、最奥に安置されている第19王朝ラムセス2世の像に朝日が当たる。この神殿が建造されたのは紀元前1,300年頃ですが、それよりはるか以前から詳細な気象学の知識を持っていたとされています。古代エジプトの人たちは、日差しの角度の変化や季節の移り変わりなどから、太陽もまた循環していると結論付け、死と再生を繰り返す循環思想、太陽神ラーの信仰を生み出したといわれています。

2022年の干支「壬寅」は、十干が「壬（みずのえ）」、十二支が「寅（とら）」です。これらを二元論的手法を用いて考えると、陰陽五行説から見た「太陽を象徴とした生命循環（十干）」と「月を象徴とした生命循環（十二支）」になり、「壬」は十干の9番目、生命の循環で言えば終わりの位置に近く、次の生命を育む準備の時期を表しています。「壬」の文字の意味は「妊に通じ、陽気を下に妊」、厳冬を耐えて内に蓄えた陽気で次代の礎となること。土の下で芽が膨んで土がぐんと盛り上がっている様子です。「壬」は「みずのえ」、陰陽五行説では「水の兄」と表記し、これは「水の陽」を意味します。五行の「水」は静寂、堅守、停滞、冬の象徴だそうです。「陽」は激しいとか大きいといった意味があり、「壬」は、厳冬、静謐、沈滞といったことを表していることになります。「寅」は十二支の3番目で、生命の循環で言えば初めの位置に近く、誕生を表します。「寅」の文字の意味は「蟄（ミミズ）に通じ、春の発芽の状態」、豊穣を助けるミミズが土の中で動き、芽吹きが始まっている状態。暖かくなつて虫たちが動き出し、春の胎動を感じさせるイメージであり、「寅」は陰陽五行説では「木の陽」に分類され、五行の「木」は成長、発育、誕生、春の象徴です。つまり「寅」は、強く大きく成長するといったことを表しています。2022年の干支「壬寅」は、陰陽五行説から見れば「陽気を孕み、春の胎動を助く」、冬が厳しいほど春の芽吹きは生命力に溢れ、華々しく生まれることを表しています。

コロナ禍で厳しい時間を過ごしてきましたが、今こそは、人類がコロナに打ち勝ち素晴らしい時間を過ごせたらいいですね。



27年前のあの日

1995年（平成7年）1月17日5時46分52秒に兵庫県の淡路島北部沖の明石海峡を震源として、マグニチュード7.3の兵庫県南部地震が発生しました。震源に近い神戸市市街地の被害は甚大で、近代都市での災害として、日本国内のみならず世界中に衝撃を与えました。犠牲者は6,434人に達し、第二次世界大戦後に発生した地震災害としては、東日本大震災に次ぐ被害規模です。震後に発生した自然災害全体でも、東日本大震災が発生するまでは最悪のものであったと言われています。当時は、スマートフォンはおろか携帯電話でさえそれほど普及していなかった時代で、災害の情報源は、テレビかラジオが中心でしたから今のようにけたたましくスマートフォンが災害危険情報を流すこともありませんでした。

私は、揺れを感じ、一度は目が覚ましたが、まだ1時間以上寝られると思い、再度、ベットに潜り込み、7時頃に再度起きてテレビを見ながら支度をしていました。当時のテレビの情報網も不十分で朝の段階では神戸市近辺で大きな地震がありました程度の報道でした。これほど重大だと知ったのは、お昼休みの職員室でテレビから流れる高速道路を落ちそうになっているバスの映像でした。

最近も至る所で地震が起きています。近くで起こった場合は、スマートフォンの災害危険情報がけたたましく鳴り響きます。人はなれてしまうと気にならなくなります。だからしんどいことつらいことを乗り越えられるんだと言われます。しかし、忘れてはならないこともあります。

1月の主な予定

- 1月6日（木）
3学期始業式
- 1月13日（木）5・6限
性教育
- 1月17日（月）～21日（金）
加茂川アクティヴウィーク
- 1月21日（金）
避難訓練
- 1月19日（水）・27日（木）
3年生面接練習
- 1月24日（月）～26日（水）
3年生学年末テスト
- 1月25日（火）
1・2年生学習確認プログラム

※ 昨年より、百人一首大会と適応マラソンは、中止となっております。

